

## 論文の内容の要旨

### 論文題目：食行動調査(EAT)とエゴグラム(TEG 第2版)による 摂食障害の検討

氏名 塚田 縫子

#### I. はじめに

今日、増加の一途をたどっている摂食障害は、その成因については未だに明らかになっておらず、代表的な摂食障害である神経性無食欲症(AN)と神経性過食症(BN)の、相互の関連もなお明らかになっていない。本研究は、摂食障害の下位分類群の相互関連について明らかにすることを目的とし、EATとTEG第2版によって各々の類似点と相違点の比較検討を試みた。その結果、ANを既往後BNになる群(ANBN)の位置づけに若干の示唆を得た。

#### II. 対象と方法

1. 対象：健常対照群として東京都内の看護系短期大学の1,2,3年生、計298人に、自記式質問紙による記名のアンケート調査によって食行動異常に関する調査を行い、同時に東大式エゴグラム第1版(以下TEGと記す)を施行した。食行動の調査にはGarnerらによる食行動調査(Eating Attitudes Testの縮小版であるEAT-26の邦訳版、以下EATと記す)を用いた。調査期間は1993年4月17日から5月8日であり年齢は18歳から22歳の全員女性であった。調査の中で全問の回答が得られている286人を健常対照群とした。月経の未初来の者および初来後中断して後未再来の者はなかった。

次いで東京に隣接する千葉県I市の国立総合病院の心療内科を1997年5月から1998年3月までに初回受診し、専門医によりDSM-IVに基づき、摂食障害と診断された患者80人にEATならびに東大式エゴグラム第2版(以下TEG第2版と記す)を施行した。そ

のうちデータの不備な者を除いた15歳から35歳までの女性患者62人を摂食障害群とした。摂食障害群の内訳は、制限型無食欲症(ANと記す)12人、むちゃ食い/排出型無食欲症2人、排出型過食症23人、非排出型過食症19人、特定不能の摂食障害(NOS)6人であった。検討にあたって、過食症のうちANの既往が認められる群について明らかにするため、はじめに過食症をAN既往の群(以下ANBNと記す)16人と、ANの既往のないもの(以下BNと記す)26人に分けて分析した。次いで自己誘発嘔吐のある排出群(-P)と吐かない非排出群(-N)を分けてAN, ANBN-N, ANBN-P, BN-N, BN-Pの5群につき検討した。むちゃ食い/排出型無食欲症は少数であるため統計対象から除外した。

## 2. 調査方法

- 1) EAT値はGarnerらの方法により、26項目のそれぞれにつき「いつもそう」から「全くない」までの6段階のうち上位3段階に3-1点を与え、その合計を得点とした。
- 2) EATの各項目における対照群別の特性を検討するために、「いつもそう」から「全くない」までの6段階に6-1点を配点し、各項目ごとの値を比較検討した。
- 3) 2)で得られた結果を、GarnerらによるEATの3構成因子に対比させて、健常対照群および摂食障害各群の特性、ならびに相互の関連を明らかにすることを試みた。
- 4) エゴグラムは交流分析理論に基づき作成された人格のプロフィールで、CP(批判的親)、NP(養育的親)、A(大人)、FC(自由な子供)、AC(順応した子供)の5つの自我状態を尺度とした行動パターンをみる心理テストの一種である。本研究では信頼性および妥当性がすでに得られている東大式エゴグラムを用いた。健常対照群ではTEGを用いたがその直後に改訂されたため、摂食障害群ではTEG第2版を用いた。TEG第2版は、TEGとほぼ同等のツールとして扱うことが可能として、摂食障害群のエゴグラムの平均値のプロフィールを健常対照群と比較したが、パターン分布についてはTEG2版はコード化されたため、それぞれによる分類を併記し検討した。
- 5) 摂食障害各群の平均値のエゴグラムを比較し、その各々の特性を検討した。
- 6) 本調査の統計的検討にはSPSSを用い、群内の差の検討には一元配置分散分析とその後の多重比較にはScheffeの検定を用いた。

## III. 結果

### 1. 食行動について

健常対照群のEATの平均値は6.8(SD=6.7)であった。各摂食障害群のEAT平均値はANは22.6,(SD=12), ANBNは31.9,(SD=12.7), BNは33.5,(SD=15.5), NOSは38.7,(SD=13.8)の順で高かった。全ての摂食障害群のEAT値は、健常対照群より有意に高く、EATがANのスクリーニングテストとしてだけでなく、BNの一次的スクリーニングにも有用なことが示唆された。摂食障害群間ではANBNとBN群間にはEAT値に有意な差を認めなかった。

EATの項目別平均値については、AN, ANBN, BNが共に健常対照群に比して有意に高値を示したのは7項目(2,3,6,10,18,20,21)で、項目2(空腹の時でも食事をさげ)、項目3(食べ物のことで頭がいっぱい)、項目6(食べ物のカロリーに気をつけ)、項目10(食後にひどくやましいことをしたように思う)、項目18(自分人生は食べ物に振り回されていると思う)、項目20(他の人たちが自分に食べるように圧力をかけていると思う)、項目21(食べ

物に関して時間をかけすぎたり考えすぎたりする)が摂食障害群に共通に見られることが認められた。EATの考案者である Garner らは 40 項目の中から因子負荷量 0.40 以上の項目として 26 項目を選んだ。それらから抽出した EAT の 3 構成因子 (I Dieting 摂食制限一項目 1,6,7,10,11,12,14,16,17,22,23,24,25, II Bulimia and food preoccupation 過食と食事へのこだわり一項目 3,4,9,18,21,26, III Oral control 経口制限一項目 2,5,8,13,15,19,20) に本調査の結果を対応させてみると, AN は III の値が ANBN および BN に比して有意に高く, ANBN と BN は共に II の値が AN に比して有意に高かった。また健常対照群は I のダイエットの因子が EAT 値の中で高い割合を占めていた。Garner らは過食型と制限型の AN は EAT の総点で違いがなくても II と III で違いがあると述べている。本研究では EAT の 26 項目の 3 構成因子のそれぞれの値は, ANBN と BN に有意差は認められなかった。

## 2. TEG

エゴグラムは健常対照群と摂食障害群で平均のプロフィールが全く異なった。摂食障害群はいずれも類似したエゴグラムパターンを示した。どの群も共通して高い CP と高い AC 尺度に挟まれて, 低い NP と FC 尺度のプロフィールであった。

TEG 第 2 版では, 摂食障害のエゴグラムプロフィールは AN は W 型, BN は U 型を示したが, ANBN は上記両群の中間のプロフィールを示し, W 型に近い NP 低位型であり臨床像と一致した。AN および ANBN は NP, FC 尺度が BN に比しそれぞれ有意に低かったが, AN と ANBN 間では両尺度の差は認められなかった。

さらに ANBN と BN の排出型と非排出型を分けて, プロフィールを描くとそれぞれのエゴグラムは NP, A, FC に変化が見られた。NP 尺度は ANBN-N, AN, ANBN-P, BN-N, BN-P の順で値が高くなり ANBN-N と AN は BN-P に比して有意に低かった。TEG のパターン分布を見ると摂食障害群は優位型, 台形, N 型, M 型が非常に少なく, 低位型が多かった。AN は 12 人中 TEG では 6 人 (TEG 第 2 版では 3 人) が W 型, NP 低位型 3 人 (TEG 第 2 版では 5 人) であり他には 2 (TEG 第 2 版では 3) パターンのみであった。摂食障害各群のエゴグラムパターンでは 60 人中 25 % 以上の 16 (TEG 第 2 版では 9) 人が W 型であり, AN においては 12 人中 50 % の 6 (TEG 第 2 版では 3) 人が W 型であった。摂食障害各群のエゴグラムパターンの数は, ANBN の非排出型, 排出型, BN の非排出型, 排出型の順で増えており, 健常対照群では優位型, 台形, N 型, M 型が多く, パターン分布は全てのパターンにわたっていた。

## IV 考察

EAT の 26 項目中 AN, ANBN, BN が共通して健常対照群より有意に高い値を示した項目をあわせると, 摂食障害群の特性として, 食事と食べ物へのこだわりと, それに対する否定的認識および自分に強いると受け取る他者の存在がうかがわれ, やせ願望, 肥満恐怖, 身体像障害ではなかった。AN の EAT で特徴的であったのは, 他者から見られる自分を意識していることおよび自分の行動について述べることであった。AN のやせ願望・肥満恐怖の得点は, 健常対照群のそれと有意差はなく, むしろ他の全ての群に比して有意に低かった。BN のやせ願望・肥満恐怖は AN に比し有意に高い値を示した。

EAT は AN のみならず, 食行動異常の一次的スクリーニング・テストとして有用であ

ることが示唆された。ANのエゴグラムはW型で高いCP, A, ACを特徴とし、自己の外部の規範を敏感に取り込んで自分の意志でしっかりと計画を立てて実行し、そのことをアピールしようとするのが伺えた。しかし共感的人間関係をもつことや自由な自己表現を行うことは困難であることが推察された。ANBNのエゴグラムが、ANのエゴグラムとBNのエゴグラムの中間を示し、ANのプロフィールに比してNP, FC尺度が上がり中間のA尺度が下がったプロフィールを示したことは興味深い。摂食障害のエゴグラムはいずれも強く規範を意識し、それを達成しようとする一方、共感的な人間関係や自由な自己表出が妨げられる葛藤状況にある。

EAT値ではANBNはBNと有意差が認められなかった。一方エゴグラムの各尺度ではANとANBN間で差が認められなかった。ANを既往してBNになった群は、BNの考えと行動をとるがANの心理的構造を持った群であることが推察された。またANBN-NはANのエゴグラムに最も近いプロフィールであり、ANBN-PはBN-Nに近似であった。BN-NとBN-Pでは前者はU型、後者がA低位型を示し、共感的人間関係や自由な自己表現の他に理論的思考や意志に弱さを伺わせるプロフィールとなっている。エゴグラムパターンでは摂食障害群はいずれも高いCPとACに挟まれた低いNP, A, FCによる低位型が共通して多かった。とりわけTEGで見ると対照群では286人中8人であったW型が、BNでは26人中3人、ANでは12人中6人であったことはAN群のエゴグラムパターンの偏りを示し、ANは性格が強化因子になっている摂食障害の一型と考えられる。

TEGとTEG第2版を比較検討した結果では、評価尺度の25～75パーセンタイルを一つに括った分だけ、TEG第2版がパターンについての感度が落ちていると推察された。本研究はANとBNは相互排除的な臨床単位ではなく、AN既往後BNを発症する場合には、ANの心的構造をもち、BNの思考と行動をとるという形で重複することを裏付けた。